Wat Pā Däng派の成立に関する小考（4）

古　山　健　一

1．はじめに

筆者はこれまで、本論集において、「Wat Pā Däng派の成立に関する小考」と題する論考を連続で3つ寄稿している［古山2019.、古山2020.、古山2021.］。これら一連の論考においては、Wat Pā Däng派[(1)]の中で語られてきた同派成立についての同派の認識や、先行のスリランカ系僧派であるWat Suan Dòk派に対して後行のWat Pā Däng派がなした自派の正統性に関する主張についてを、同派内で編述された2つの史書、すなわち、*Jinakālamālī*（パーリ語。※以下Jkmと略記）とWat Pā Däng版*Mūlasāsanā*（*ตำนานมูลศาสนา ฉบับวัดป่าแดง*、北部タイ語。※以下MS.CPと略記）の記述をもとに論じてきた[(2)]。

本稿は、これらの前稿とその目的を同じくする続編であり、かつその終編である。

前年の拙稿においては、Jkm及びMS.CPでの「Wat Pā Däng派」なる僧派の形成過程の「最初期」についての語りをその論点とした。ここに言う「最初期」とは、「パーリ語改革」[(3)]を志してスリランカに修学したDhammagambhīra師（※Jkmの人名表記。MS.CPのそれによればÑāṇagambhīra師）らが、同地からチエンマイに帰着し、Wat Pā Dängに止住して同地で授具足戒式を執行し始めるまでの期間、具体的には、サームファーンケーン王の在位期に属するC.S.786年（A.D.1424/25、※タイ小暦年＋638年＝西暦年[月・日により＋1年]）からC.S.803年（A.D.1441/42）頃までの時期を指して筆者が便宜的に用いる時代区分である。本稿では、まず、前年の拙稿における所論のうち、〈チエンマイのサームファンケーン王は、スリランカ帰りの比丘たちのことを顧慮していなかったのではなかろうか〉［古山2021.p.252］との推察について、いま少し補強しておく。その内容に当該前稿と重複する部分の含むことがあることを予め断っておきたい。次いで、主にJkmの記述に依りながら、筆者が便宜的に「確立期」と呼ぶことにしている、C.S.803年からC.S.813年までの間における彼らの動向について論じる。随所にC.S.813年以降の動向

についても適宜言及しておきたい。これらを以って、A.D.15c前半期にラーン・ナー地域でWat Pā Däng派が成立したことに関する同僧派内での語りに対する考察を一応締めくくりたいと思う。

この小考もまた研究ノートに類するものであり、相も変わらずラーン・ナー仏教史のうちの些細な断面を切り取って戯れるが如きものに過ぎないが、該地域の仏教理解を深めるのに多少なりとも役立つことができるならば幸いである。前の拙稿も含めて至らぬ点は多々あろうかと思うが、斯様なところについては識者諸賢のご批判とご叱正を乞いたい。

2. Wat Pā Däng 派形成過程の「最初期」について

Jkmの第23章“Sīhaḷasāsanāgamana（スリランカ仏教の到来）”によれば、スリランカを発ったMahādhammagambhīra師とMahāmaṅgala長老を上首とする修学僧らの一行は、アユタヤ、シーサッチャナーラーイ、スコータイ〔など〕を経て、サームファーンケーン王の在位期に当たるC.S.792年の戊年（kukkura-vassa：A.D.1430/31年＝仏入滅後1974年）に、Nabbisi都すなわちチエンマイに到着した。そして彼らは“Rattavanamahāvihāra”なる寺院 ― タイ語で言うところのWat Pā Däng Luang（วัดป่าแดงหลวง） ― に住した［Jkm. pp.93-94；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.131］。

Jkmの語りはこれだけであり、Wat Pā Däng派誕生の立役者とも言うべき彼ら修学僧たちのこの記念すべき帰国のことを、まったく華々しく語っていない。チエンマイに到着して“Rattavanamahāvihāra”に住まった、と実に素っ気ない語り方しかしておらず、この寺院についても彼らがそこに住まうに至った経緯についても無言であり、彼らの帰着を王家や高位の誰かが出迎えたり、彼らのために住処を設えたなど、そうした語りは一切ないのである。後代のMS.CPの語りはそうではないが、こちらは情報操作の手が入っているように感じられる。

ちなみに、Wat Suan Dòk派の史書である*Mūlasāsanā*（*ตำนานมูลศาสนา*、以下MSと略記）にも、Wat Pā Däng派を成立させる僧たちのことに言及する箇所［MS. pp.245-246］があるのであるが、その僧たちは“ธรรมคัมภีร์”（※JkmのDhammagambhīraに対応）、“เมธังกร”（※同じくMedhaṅkaraに対応）、“ญาณมงคล”（※同じくÑāṇamaṅgalaに対応）、“พรหมกุมพกาม”（※？）、“มหาสวามีเถร”の5名であるとする。最後の僧の名は実名ではなく、“Mahāsāmi”すなわち僧長の地位にあった長老という意味であろうから、この5僧の中にはWat Suan Dòk派内の指導者的地位にあった長老が含まれて

いたということになる（※MS.CPにはWat Suan Dòk派の僧長Dhammakitti師が登場していた）。これが事実であれば、Dhammagambhīra師らは、もとはWat Suan Dòk派に属していたと考えることができるだろう。MSでは、彼らは、Wat Suan Dòk派のとは異なる托鉢威儀などをなし［Cf. Penth2004. p.76；Daniel2006. p.65］、貝貨幣や銀・金の施捨を受け取っていた、という。彼らは、スリランカに行き授具足して比丘になろうとし、アユタヤへ赴いたのであるが、そこにおいてSumana師の教えを一掃して自らの教条にしたがわせようした。すると、アユタヤのDhammatrailoka（ธรรมไตรโลก）大長老から「異端」との批判を受けることになり、論争に負けて追い出され、北のムアンの逃げた（※つまりスリランカには行っていない）。そして、北のムアンではWat Suan Dòk派との論争に負け、デーンの木の森（Pā Däng）に来た、と語られている。実に興味深い語りではあるが、Wat Suan Dòk派内に生じた異端分子のことを貶めているだけの感情的な語り口ではなかろうかとの感が否めない。しかしながら、この語りにおいて、Dhammagambhīra師らが「最初期」の早々にWat Suan Dòk派から批判を受けたことを匂わせるあたりは、Jkmには語られていない彼らが置かれた状況のことを考えるのに参考になるかと思う。

話を戻すと、前稿［古山2021.］では、Wat Pā Däng派の史書であるJkmが同派の拠点寺院であるWat Pā Dängのことを何も語っていない点について、Jkmにおける、彼らスリランカ帰りの比丘たちが“Rattavanamahāvihāra”に住まったという文の後の語りに注目して考察を加えた。

Jkmの当該箇所［Jkm. p.94；Cf. Jkm-tr[J/E]. pp.131-133］(4) によると、彼らがC.S.792年にチエンマイの“Rattavanamahāvihāra”に入った後、第7年目と第8年目の雨安居はこの寺でのみ過ごした（※第1年目～第6年目の雨安居は帰途の最中）。第7雨安居の年に当たるC.S.793年の出来事は一切語られておらず、彼らのチエンマイ帰着後の活動について語り出されるのはC.S.794年からである。これらの諸活動は、その殆どまたはすべてが、チエンマイ都以外のところで行われており、しかも、サームファンケーン王が自ら支援したとされるものは1つもない。Jkmでは、C.S.795年にJaṃrāya（チエンラーイ）都で執行された授具足戒式の後のこととして、〈…Tissa王（※サームファンケーン王）の勅令がおよぶ王国において、僧団は何回も授具足戒式を行った。…〉と述べているが、国王が支援したのであればそのことを端折らずに述べたであろうから、これらの授具足戒式も同様であったと思われる。

Jkmでは、チエンマイにおいて国王の支援により執行された彼らの僧団儀式というのは、続く第24章“Mahādhātucetiya-kathā（大舎利塔の話）”における、C.S.803年のティローカラート王即位の語りの後にしか現れないのである。

既述の如くJkmのテキストには種々の問題が指摘されているので［Cf. 古山 2017. pp.327ff.］、あくまでも「現存テキストの」しかも「PTS本の」という限定辞を付けた上での話にはなるが、筆者は斯様なJkmにおける語り方から、〈チエンマイのサームファンケーン王は、スリランカ帰りの比丘たちのことを顧慮していなかったのではなかろうか〉との推察を示した。そして、この推察の上に、サームファンケーン王がチエンマイに戻る修学僧らのために寺院を設えるというようなことはなかったのではなかろうかということ、“Rattavanamahāvihāra”すなわちWat Pā Dängというのは既存の寺院であった可能性が考えられるということを述べた。

筆者は、チエンマイのWat Pā Däng派というのは、このように国王の庇護を欠いた中で胎動し始めたものと考えているのであるが、斯様な状況をさらに裏付けうるかのように思われる語りが、Jkm第26章“Ratanapaṭimā-kathā（宝石仏像の話）”の中にも見られる。それは、古いRāja-kūṭa(5)の改修工事のことを述べる同章の前段部分における語りの中である。

この工事は、C.S.840年に、ティローカラート王（Bilakarājādhipati）が、セーンムアンマー（Lakkhapurāgama）王の時代に建設された古いRāja-kūṭaの改修を“Sīhaḷagotta”(6)という名の大将軍（mahāsenāpati）に命じておこなわせたもので、C.S.843年に完了した。このことを語る中に、〈…また、Mahādhammagambhīraが Laṅkā島から礼拝のためにもたらし、その当時は受け継いでSīhaḷagotta大将軍が供養していたところの、その舎利（dhātu）も彼はそこに安置した。…〉［Jkm. pp.98-99；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.140］という件がある。ここに登場する「舎利」とは、Dhammagambhīra師がスリランカから戻る際に、現地の僧団から礼拝用にもらい受けた“Jinavara-dhātu”［Cf. Jkm. p.93］を指すと見て間違いなかろう。このDhammagambhīra師が持ち帰った仏舎利が、如何なる経緯を辿ったのかは詳らかではないが、少なくともこの工事期間までにはティローカラート王臣下の将軍の手に渡っていたのである。このことは、このスリランカ伝来の仏舎利がサームファンケーン王に贈与されることもなく、同王が仏塔が建てて供養するというようなこともなかったことを示していると言えるだろう。Wat Suan Dòk（Jkm：Pupphārāma）派の祖であるSumana師がスコータイから持ち来った“Jinavara-dhātu”が、C.S.735年に〔恐らくはクーナー王が仏塔を設えさせて〕同寺に安置された［Jkm. p.91；Cf. Jkm-tr[J/E].

pp.126-127]、というのとは実に対照的である。Dhammagambhīra 師が持ち帰った仏舎利をめぐる Jkm の語りというのは、その事実がどうであったのかはさておき、サームファンケーン王のスリランカ修学僧たちに対する非歓迎的または不作為的な態度を、極めて暗示的なかたちではあるが、暴露しているようにも思われるのである。

ところで、Jkm 第23章の中にはサームファンケーン王の人物評が語られているのであるが、これにも注目すべきと考える。

> 彼（※ Lakkhapurāgama 王＝セーンムアンマー王）の死後、彼の実子である、蛇年生まれの Tissa 王（※サームファンケーン王）が、12歳から王権を行使した(7)。／教え（sāsana）に対する信仰が鈍かった彼は、諸々の外のものに浄信を持ち、善人によらず、夜叉の奴隷（yakkha-dāsa）たちを格別に供養した。（v.109）／園林、樹木、霊域（cetiya）を、諸々の山を、諸々の林を、かの王は、牛（go）・水牛（mahisa）などや土地（vatthu）で格別に供養した。（v.110）／また、ほかならぬ彼の領土（āṇā-raṭṭha）には多くの人々が住んでいたが、それぞれの町（paṭṭana）において「夜叉の奴隷」として名をはせた。（v.111）／自分の生地である Sāratīra という美しき都市において、“Puracchanna（町の覆い）”として名をはせる大精舎をつくらせた。（v.112）／そして、彼は、その大精舎への援助のために農耕地（khetta）などを分けて布施した。また、自国における各々の場所において仏などに農耕地などを切り分けて布施した。［Jkm. p.92；Cf. Jkm-tr[J/E]. pp.128-129］

Jkm は、サームファンケーン王は仏教に対する信仰が鈍く、仏教外のものを信心しており、土着の精霊信仰の類と思しきものに熱をあげていて、善人（仏）によらず、夜叉の奴隷（鬼神の信奉者）を特に外護していた、と語っているのであるが、このような言及がなされているラーン・ナー王朝（マンラーイ朝）の国王は、Jkm においては、このサームファンケーン王のみに限られている。Jkm は余り触れないが、*Chiang Mai Chronicle*（*ตำนานพื้นเมืองเชียงใหม่*、※以下同様）など他の諸史料の語りを見ると、この王朝の国王たちは、仏教の信奉者・外護者を標榜するようになっても、その度合いに濃淡はあったであろうが、土着の精霊信仰の諸観念を有し、これにしたがう行為を様々になしていたのではなかろうか(8)。Hans Penth は〈教養のある階層は「改良された」仏教や「純粋な」仏教でさえ追及したが、諸精霊や呪術に対する根強い信仰が仏教と並行して続いてた。…〉［Penth2004.p.78］と述べている。Jkm が〈…自己の利益と他者の利益を知ることができ、賢く、信仰を持ち、浄信

を持ち、深遠な智をそなえていた〉［Jkm. p.95；Cf. Jkm-tr[J/E]. pp.133-134］と称えるティローカラート王（Bilaka-rāja）でさえ例外ではなかろう（※Cf. Penth2004. p.82／古山2016. p.327註（17）に記した事柄を1つの例として示しうる）。にもかかわらず、Jkmがその人物像に、「夜叉の奴隷の外護者」という非仏教徒的な人物であったとの批評を殊更に与えているのは、このサームファンケーン王のみに限られているのである。

上引の文中には、サームファンケーン王の出生地Sāratīraにおける Puracchanna大精舎[9]の建立のことが言及されていた。この寺院には農耕地の寄進もおこなったとのことである。また、仏など（三宝）に対する寄進の名目で、他にも国内各地において農耕地の布施をおこなったとも述べられていた。これらは誰の目から見ても仏教的善行にほかならないだろう。Jkmの語りは、この王が仏教的善行を積み、正法王的な側面を持っていたことを認めているのであるが、そこのみに焦点を当ててラーン・ナー王朝における仏教を外護した王の1人ということで話を済ませようとはしていない。サームファンケーン王は実際に「夜叉の奴隷」をかなり熱心に外護していたのかもしれないが、態々このことを取り沙汰しないという道は選ばず、正法王的な側面をかなり稀釈してしまいかねないような人物評を敢えておこなっている。〈非難めいた記述〉［飯島2020. p.120］をおこなっているのである。このことから、Jkmの述作者には、Wat Pā Däng派の「歴史」を紡ぐのに当たり、まさにその治世期が彼らの「最初期」と重なるサームファンケーン王のことを手放しで称賛する気がなかった、ということが言えるのではなかろうか。

因みに、Jkmにおける、サームファンケーン王の父であるセーンムアンマー王についての人物評に目を移すと、そこでは、この王のことを、〈…Lakkhapurāgama（セーンムアンマー）王は、三宝を信奉し（māmaka）、多聞であり、法を保持し、学んだことを完全に答えられる者であり、多くの会衆らに常に法を語らせていた（v.105）〉［Jkm. p.91；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.127］と絶賛している。この件に続く語りでは、〈連声（sandhi）と名詞（nāma）などだけであっても、文法書（sadda-sattha）を学ぶ者たちがあれば、彼らの誰であっても、彼（セーンムアンマー王）は四資具によって奉仕した（v.106）〉［Jkm. p.92；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.128］と述べられている。ここに言われる「文法書」とは、パーリ語文典の*Kaccāyana-byākaraṇa*を指していると考えられる［Cf. Jkm-Ind. p.30］[10]。そうであるならば、この部分は、セーンムアンマー王がパーリ語文典とりわけ*Kaccāyana-byākaraṇa*の学習を奨励していたということを語っていると解しうるが、何故に斯様なことが態々語られているのかと言えば、それは彼らの「歴史」

においては特筆すべき事柄であったからであろう。案ずるに、このパーリ語文典学習奨励策を、それから30年程後に「パーリ語改革」を志してスリランカに旅立つ僧たちが現れ、Wat Pā Däng派が勃興することにつながる遠因となった、とJkmの述作者が受け止めていてからではなかろうか。Jkmがセーンムアンマー王を絶賛するのは、前段に語られるSīhaḷa-paṭimā（シヒン仏像）を叔父から奪還してチエンマイに招来し安置することに成功したという事績も当然含まれてはいるのだろうが、何よりも、自派の興起に関係しているであろうところの、このパーリ語文典学習奨励策を評価しているからと思われる。

それにしても、この2人の王の人物評は実に対照的である。この父子両王の人物評において、Wat Pā Däng派の興起・興隆に寄与したか否かという点がかなり強く反映されているのであるとすれば、サームファンケーン王に夜叉の奴隷の外護者であったという*negative*な言及を態々添えているのは、スリランカ修学僧らが帰着した後に積極的に支援の手を差し伸べなかったからではなかろうか。同王の人物評の中には、こうしたことへの当て擦りが込められていると見ることもできるのではなかろうかと思う。

ところで、E.W.Hutchinsonが1951年にJSS誌上に寄せた論考の中に、チエンマイのWat Jet Yòt（วัดเจ็ดยอด）の寺誌（ตำนาน）の1本[(11)]が現代タイ字の翻字されて掲載されている。このWat Jet Yòtは、ラーン・ナー王朝（マンラーイ朝）時代にはWat Pā Däng派の有力拠点であったと考えられる寺院であり、Jkmでは“Mahābodhārama”として登場する。筆者は、このWat Jet Yòtの寺誌類もWat Pā Däng派の語る歴史を研究する上で参照すべき文献資料の1つと考えている。E.W.Hutchinsonが翻字した同寺の寺誌は、C.S.889年（A.D.1527/28年）の出来事の語りで終わっている。このことから、このテキストが著された時期はA.D.16c中頃ではないかと筆者は推定している。同じくC.S.889年の出来事までが語られているJkmの述作時期とは然程時を隔てていないように思う。仮に、E.W.Hutchinsonが言うように（※註（11）参照）、この寺誌のテキストが増広を伴ったJkmの「気ままな翻訳」であるならば、Jkmよりは後の撰述とはなるがその時期はA.D.16c後半の範囲内ではなかろうかと思う。

この寺誌のテキストであるが、その冒頭部分［Hutchinson1951, p.51（英訳はp.40）］は、スリランカ修学僧らのチエンマイ到着の語りになっている。そこでは、Mahāñāṇagambhīra師、Mahāmedhaṅkara師、Mahāsīlavaṃsa師らのチエンマイ帰着をティローカラート王治世期のこととし、かつ、ラムプーンのWat Phra Yün

(วัดพระยืน) に逗留していた彼ら修学僧たちを同王がチエンマイに招請し、彼らのために居住寺院も用意した、という話になっている。サームファンケーン王を登場させずにWat Pā Däng派の「最初期」のことを語っており、前稿［古山2021. p.255］でそのあらましを紹介したMS.CPの語り(12) と酷似している。筆者は、このMS.CPの語りについて、〈もしかすると、MS.CPの編述者は、Jkmに見られるような伝承を知ってはいたが、それではÑāṇagambhīra師らのチエンマイ帰着の場面を描くのに自派称揚の点で不都合を感じ、かと言って、Wat Pā Däng派の形成過程の最初期に積極的に手を差し伸べなかったサームファンケーン王が何かをしたと語ることには納得がゆかなかったので、このような語りに仕立て直したのかもしれない〉［古山2021. p.251］との想像を述べた。この受け止め方は今も変わっておらず、上述のWat Jet Yòtの寺誌についても同じ想像をめぐらしている。さらに加えて言うならば、斯様な語りの仕立て直しは、この僧派を熱心に外護したティローカラート王を賛嘆するのにも都合がよいし、ラーン・ナー王家との関係においては比較的穏便な語りになるだろう。

なお、E.W.Hutchinson の翻字したWat Jet Yòtの寺誌の撰述期については改めて慎重に検討しなければならないであろうが、上述の如くA.D.16c内と考えることができるのであれば、筆者がA.D.17cの初め頃の編述と推定しているMS.CPよりは古いということになり、語りの「仕立て直し」がなされた時期については、MS.CPからではなく、これよりも前に位置付けなければならないかもしれない。また、この寺誌の述作時期がJkmのそれとは然程時を隔てていないのであれば、A.D.16cのWat Pā Däng派内においては、Jkmのように、サームファンケーン王を登場させて直截的ではないが批判を交えながら「最初期」を語る語り方と、Wat Jet Yòtの寺誌（そして後代のMS.CP）のように、サームファンケーン王を〔早死にさせて〕登場させずに「最初期」を語る語り方があったということになるであろう(13)。ただし、いずれの語り方も、サームファンケーン王に対して抱いていたであろう同僧派の不満が投影されたものであるところに違いはないのではないかと考える。

3.「最初期」の授具足戒式について

Jkmの第23章の後半部［Jkm. p.94；Cf. Jkm-tr[J/E]. pp.131-133］で語られるチエンマイに戻ったスリランカ修学僧らが執行した授具足戒式については、すでに前稿

［古山2021.］においてその概要を述べているが、ここでこれをいま少し詳らかにしておきたい。

まず、前稿に述べたとおり、Jkmにおいては、Dhammagambhīra師ら修学僧がチエンマイに到着し、Rattavana-mahāvihāraすなわちWat Pā Dängに住まったことを述べる語りを最後に、以後の語りからはDhammagambhīra師の名が現れなくなる。C.S.794年から始まる授具足戒式執行などの語りにおいては、執行者は「彼ら」や「長老たち」「僧団」という表現になり、“Mahādhammagambhīra”という名を出さなくなるのである。そして、C.S.803年に、ティローカラート王が即位した後でこの王の支援により行われた、恐らく彼らがチエンマイで初めて執行した大規模な授具足戒式は、〈…Medhaṅkara・Ñāṇamaṅgala・Sīlavaṃsa大長老を上首とする比丘僧団〉［Jkm. p.95；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.134］が行ったと語られており、ここに彼ら修学僧の筆頭格であった“Mahādhammagambhīra”の名は挙げられていない。同師と共にスリランカへ出かけた、他の長老たちの名があるのみである。筆者（古山）は、このような語りの状況から、C.S.794年からC.S.803年までの間に、Dhammagambhīra師が、何らかの理由（様々に想像できるが）でWat Pā Dängを去ったか、あるいは死亡したからではなかろうか、と推察した。

ちなみに、MS.CPでは、第18章において、C.S.802年にÑāṇagambhīra師がチエンマイを離れて他の幾つかのムアンに赴いたことが語られ［MS[CP/T]. pp.20-22；MS[CP/E]. pp.96-98］、第19章においては、C.S.811年にラムパーンに行き、C.S.814年に亡くなったことが語られている［MS[CP/T]. pp.22-23；MS[CP/E]. p.99］。これらの語りをどこまで信用して良いのかは定かではないが、C.S.802年に修学僧たちのリーダー格の僧がチエンマイを去ったというところは、上述の筆者の推察とは齟齬をきたさないとだけ述べておきたい。

さらに付言すると、*Zinme Yazawin*の「Wat Pā Däng派史」の中でも、ティローカラート王治世期の話からはDhammagambhīra師が現れなくなる［Cf. Zinme. p.47］。

Jkmによれば、C.S.794年からC.S.803年までの間における授具足戒式の執行というのは、上述の如くDhammagambhīra師の名には特段言及しない「彼ら」や「長老たち」「僧団」によって執行された。それでは、ある時点からDhammagambhīra師を欠くことになったであろう彼らにおいて、その後具体的に誰がこの僧派形成活動を牽引していたのかと言うと、それは不詳と言うほかないが、C.S.803年のチエンマイにおける授具足戒式の執行者が上引の如く〈…Medhaṅkara・Ñāṇamaṅgala・Sīlavaṃsa大長老を上首とする比丘僧団〉と述べられているこ

とからすると、この 3 師が中心であったのかもしれない。

さて、その彼らが「最初期」に執行した授具足戒式であるが、Jkmの第23章内の語り［Jkm. p.94；Cf. Jkm-tr[J/E]. pp.132-133］によれば、最初のそれは、C.S.794年にKhelaṅga（ラムパーン）都において太守Sūraの支援によりおこなわれたものであった。ここではDadara-pura（※不詳、Cf. Jkm-Ind. pp.54-55）のCanda師が授具足を受けたと言う。

このDadara-puraのCanda師は、C.S.806年にJayasena（チエンセーン）都のPallaṅkadīpakaにおける部分結界（khaṇḍa-sīmā、「小界」とも）の結界式において、結界認定の羯磨文（sīmāsammuti-kammavācā）を誦唱したと言う［Jkm. p.95；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.134］。

第 2 回目は、同じC.S.794年にHaripuñjaya（ラムプーン）において執行された。ここでは、Dhammarakkhita師、Dhammaratana師、Ñāṇabodhi師が授具足を受けたとのことである。

前 2 師の名はその後Jkmの語りに現れないが、“Ñāṇabodhi”という僧名はこの後にも現れる。ヨートチエンラーイ（Jkm：Jaṃrāyagga）王治世期のC.S.855年に、Pallaṅkadīpakaの旧部分結界（※Ñāṇamaṅgala師が結界したもの）の浄化が行われ、この結界浄化をおこなった大長老たちの名の中に“Ñāṇabodhi-mahāsāmi”が挙げられている［Jkm. p.104；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.147］。C.S.854年に建立されたTapodārāma（Wat Ram Poeng）の碑文の中に〈Pā Dängの主Mahāsāmī Ñāṇabodhi〉（มหาสามีญาณโพธิ เจ้าปาแดง）［Tapodharam-Isc. pp.53-54；Cf.古山2016. pp.336-335］とあり、この碑文中の“Mahāsāmī Ñāṇabodhi”はJkmの“Ñāṇabodhi-mahāsāmi”と同一人物に違いない。ヨートチエンラーイ王治世期に、Wat Pā Dängの住持であり、Wat Pā Däng派の僧長（mahāsāmi）の地位にあった“Ñāṇabodhi”という名の大長老がいたのであるが、もしかするとこの大長老は、C.S.794年に授具足を受けたÑāṇabodhi師と同一人物であるかもしれない。そうであれば、C.S.855年の時点でこのÑāṇabodhi師は雨安居歴61年で年齢81歳以上ということになるが、決してありえないことではないだろう。

付言すると、*Chiang Mai Chronicle*には、C.S.848年にWat Pā Däng住持であった長老の名として“Ñāṇa”（ญาณเถรเจ้าปาแดง）とあり［C-Chronicle. pp.105-106；C-Chronicle-tr. p.158］、これはÑāṇabodhi師の略呼称と考えることも可能であろう。

なお、このÑāṇabodhiという僧が“mahāsāmi”と呼ばれる地位に就いた年であるが、C.S.854年またはC.S.848年よりも以前であるということしか分からない。

後にまた触れるがMedhaṅkara師が初代の“mahāsāmi”であり、Jkmにおいては同師への言及はC.S.815年頃までとなっている。Jkmは、A.D.1453～1516年（※C.S.815～878年）のWat Pā Dängに関する記述がなく、またA.D.1455～1476年（※C.S.817～838年）の記述を欠いている［Jkm-Ind. p.x；Cf. 古山2017. p.325］。ゆえに、Medhaṅkara師が何年までこの地位にあったのかを推知する材料がないのであるが、C.S.815年には年齢が60歳を超えていたと推定される(14)し、C.S.838年以降の語りには登場しないので、Jkmが記述を欠くA.D.1455～1476年の期間には代替わりしたのではなかろうかと思う。誰がその後継となったのかは不詳であるが、Ñāṇabodhi師が第2代の“mahāsāmi”になったのかもしれない。

第3回目はC.S.794年にNāḷikerayāṅga河畔（ラムプーン・チエンマイ地域のピン川の畔）で執行された。

第4回目は同年にKumbhāmāpanna（ウィエン・クムカーム）の川岸においてSiridhammacakkavattinarinda（ティローカラート王）の兄Bālisadeva王子（※サームファンケーン王の5番目の息子で1つ上の兄。Cf. Jkm-tr[J/E]. p.132 *footnote* 2）の支援により執行された。ここに初めて国王に近い王族の名が出てくるが、これは注目しておいて良いだろう。

第5回目は、C.S.795年にJayasena（チエンセーン）都のPallaṅkadīpakaで執行された授具足戒式であり、多くの良家の子たちが授具足を受けたとのことであるが、特に名が挙げられているのはDhammasenāpati師とKulavaṃsa師である。

Jkmには、C.S.840年に、Dhammasenāpati大長老が旃檀仏像（Candana-bimba、※インド舎衛城で造像の旃檀仏像）を招来して、チエンマイ都東方の濠の外側にあるAsokārāmaなる寺院に安置したとする語りがある［Jkm. p.124；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.179］。ここに登場する大長老は、C.S.795年に授具足を受けた同名の比丘と同一人物であるかもしれない。そうであれば、C.S.840年時点で雨安居歴が45年、年齢65歳以上ということになる。なお、Jkmには“Dhammasenāpatissa ārāme vihārassa...”［Jkm. p.123；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.178］という1句があるのであるが、Hans Penthは、ここに言われる“ārāma”について、Wat Jet Yòtの寺誌の語りを参考にして、Wat Jet Yòtの一部で、もとはDhammasenāpati師の住居であったかもしれない、と述べている［Cf. Jkm-Ind. pp.221-223］。

Kulavaṃsa師の名はその後Jkmの語りには現れない。

第6回目は、C.S.795年にJaṃrāya（チエンラーイ）都のSuvaṇṇa-pāsāṇaにおいて雨安居中に執行された。そして、この時に、Dhammadinna師が授具足を受け

たと言う。

Jkm 第27章 “Bilakarājakathā（ティローカラート王の話）” の語りによると、C.S.845年、チエンマイ都の西南方にあった Tālavana-mahāvihara [15] においてラワ仏像（Lava-paṭimā）の形相をした大青銅仏像が鋳造された頃、この寺院においては、“Dhammadinna” という名の大長老が、比丘衆の阿闍梨となり、和尚となっていた、とのことである［Jkm. p.103；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.146］。ここに言及されている Tālavana-mahāvihara の大長老というのは、C.S.795年に授具足を受けた同名の比丘であるかもしれない。C.S.845年時点で雨安居歴50年、年齢70歳以上ということになるが、無理はなかろう。ちなみに、Wat Jet Yòt の寺誌には、C.S.839年（A.D.1477年）にティローカラート王が Wat Jet Yòt で執り行わせた三蔵結集（※タイで言う第 8 回結集、Cf. Penth2004. pp.103-104）を取り仕切った長老として、Wat Pā Tān Nòi（วัดป่าตาลน้อย）の住持 “พระธรรมทินมหาเถร” の名が挙げられている［Hutchinson1951. pp.55-56（英訳は pp.43-44）］。この僧名のうち “ธรรมทิน” はパーリ語の “Dhammadinna” に対応する。この “พระธรรมทินมหาเถร” という僧を、Jkm に現れる Tālavana-mahāvihara の Dhammadinna 大長老と同一視することは十分に可能であろうと考える。

Jkm の第23章では、上述の第 6 回目の授具足戒式執行の語りの後で、〈…Tissa 王（※サームファンケーン王）の勅令がおよぶ王国において、僧団は何回も授具足戒式を行った。…〉と述べているが、ここにおいては特記される比丘の名はない。

以上が、スリランカ修学僧らがチエンマイ帰着後の「最初期」の時期に執り行った授具足戒式についての Jkm における語りである。僅か10年にも満たない期間のことであり、またサームファンケーン王の特段の外護もなかったであろう状況でのことであるが、その語りにしたがえば、チエンマイ都以外の各地で精力的に僧派形成活動を展開し、後に傑僧となったと思しき有為の人材も得たようである。

4.「確立期」の動向

筆者（古山）は、スリランカ修学僧らがタイに戻った C.S.786年から、彼らがチエンマイ国王の支援を受けて僧派活動を開始する C.S.803年までを、便宜的に Wat Pā Däng 派史の「最初期」と時代区分している。この時期の動向については、前稿［古山2021.］と本稿の前 2 節において述べたとおりである。

同僧派は、サームファンケーン王治世期と重なるこの「最初期」の後、ティ

ローカラート王への代替わりを境に、俄かに国王との関係が濃密となり、Wat Pā Dängと同僧派の長老は国王のなす仏事や積徳行為の受け皿となり、同派は王室御用僧団の如き様相を呈するようになる。斯様な動きの中で、僧派におけるリーダー格の長老は、僧派長を意味する“mahāsāmi”を名乗るようになり、国王の師ともなる。また、国王によってWat Pā Dängには僧派専有の結界処（布薩堂）の設置が認められようになる（かつ、そこで恒常的に授具足戒式が執行されるようになる）。つまり、スリランカ修学僧らの集団が、外的には社会的な存在感を高め、内的にはより体制的となって僧派らしさを強めるようになるのである。こうした動きが起こるのはJkmの語りによればC.S.803年（A.D.1441/42）からC.S.813年（A.D.1451/52）までの期間であるが、筆者は、やはり便宜的にではあるが、この時期に1つの時代区分を与え、これを「確立期」と呼ぶことにしたい。本節では、この「確立期」における彼らの動向について述べる。

まず、繰り返しになるが、Jkmにおいては、チエンマイにおいて国王の支援により執行された彼らの僧団儀式というのは、第24章“Mahādhātucetiya-kathā”における、C.S.803年のティローカラート王即位の語りの後にしか現れない。また、同じくJkmの語りにおいては、Dhammagambhīra師らがチエンマイ帰着後に住処とした“Rattavanamahāvihāra”すなわちWat Pā Dängに、整備や拡張事業の手が入るのは、ティローカラート王治世期初期のC.S.809年以降のようである。こうした語りの状況から、この僧派が国王の積極的な外護を得られるようになったのは、ティローカラート王即位の後からであると考える。

ティローカラート王が即位して早々に何故に彼らに目を向けたのかということについては、目下の筆者にはよく分からないが、Jkmによれば、この王が〈…自己の利益と他者の利益を知ることができ、賢く、信仰を持ち、浄信を持ち、深遠な智をそなえていた〉（※上述）からということなのであろう。

Jkmの語りからは外れるが、*Chiang Mai Chronicle*には、ティローカラート王はクーデターによって父サームファンケーン王から王位を簒奪した、と語られている［C-Chronicle, pp.77-78；C-Chronicle-tr, pp.121-122］。想像するに、即位した頃のティローカラート王には前王の治世を刷新しようとする気概があったであろうから、スリランカ直伝の“Sīhaḷa-sāsanā”を標榜するところの修学僧たちによる新僧団を前王が等閑に付していたのであれば、すでにある程度の活動も展開していたこともあって、これに外護の目を向けるようになったのではないかと推察する[16]。

なお、この時期、既存のスリランカ仏教系僧派であるWat Suan Dòk派との関係はどうであったのかと言うと、第2節で触れたMSの語りや、以前の拙稿［古山2020.］で紹介したMS.CPの語りから、“Dhammagambhīra”または“Ñāṇagambhīra”や“Medhaṅkara”と呼ばれる僧は、もとはWat Suan Dòk派の比丘であった可能性が高いように思われるので、「最初期」以来、Wat Suan Dòk派からは相当な反発や批判の如きものが出たであろうし、その軋轢というものは「確立期」にも続いていたのではなかろうかと思う。Jkmはそのことについて何も語っていないが、MSにはこれを匂わせる語りがある。しかしながら、*Zinme Yazawin*の「Wat Pā Däng派史」が語るように、サームファンケーン（Baña Sankhaya）王時代に彼らは戒律を遵守し、一切衆生への慈しみを実践していたのであれば［Cf. Zinme. pp.46-47］、殊更にWat Suan Dòk派と諍論を起こすようなことは慎んでいたかもしれない。また、「確立期」においては、Wat Suan Dòk派からの排撃は然程熾烈ではなかったかもしれないと思う[17]。

Wat Suan Dòk派のMSにはWat Pā Däng派の「最初期」から「確立期」にかけてのことに言及していると思しき語りがあり（pp.246ff.）、これはこれで精緻に考察を加える必要があるのであるが、本稿の目的から逸脱するため、ここでの言及は最小限度にとどめておく。後日また機会を得て、しっかりとしたテキストの読解と論考を示すこととしたい。

ティローカラート王の即位から始まる「確立期」では、この僧派において指導者的役割を果たして活躍したのは、Dhammagambhīra師とともにスリランカに修学したMedhaṅkara師である。

Jkmの第23章には、彼らのスリランカ渡航のことを語り始める段の冒頭に、〈このNabbisi（※チエンマイ）都において、Tissa王（※サームファンケーン王）が〔王権を〕行使していたとき、Medhaṅkaraをはじめとする長老たちがLaṅkā島（※スリランカ）からここにやって来た（v.113）〉［Jkm. p.92；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.129］との1詩句が置かれている。この詩句は、C.S.785年にスリランカへ出立したDhammagambhīra師ら修学僧のチエンマイ帰還のことを述べているとも解せるし、これとは別にそれ以前にMedhaṅkara師をリーダーとするチエンマイ僧らのスリランカ渡航があってその帰着のことを述べているとも解せる。どちらが相応とは俄かには断じられないが、仮に前者であるとした場合、この詩句の中では、スリランカ修学僧のリーダーは“Dhammagambhīra”ではなく“Medhaṅkara”である、との認識が示されていることになり、直後の散文部分の語りとは齟齬をきたしてしまう。ゆえに筆

者は、前者の解し方を全く否定するわけではないが、後者の解し方のほうがひとまず穏当ではないかと考えている。そうであるなら、彼ら修学僧たちのうち、少なくともMedhaṅkara師には2回のスリランカ渡航経験があったということになり、換言すれば、Dhammagambhīra師を筆頭とするスリランカ修学僧の中でMedhaṅkara師は「先達」であった、ということになる。もしかするとMedhaṅkara師はスリランカ修学僧らの実質的なリーダーであったのかもしれない。そうであったのなら、彼らの「最初期」の活動においてMedhaṅkara師の存在というのは、Dhammagambhīra師と同等かまたはそれ以上に大きかったのかもしれないし、Dhammagambhīra師が早々にWat Pā Dängからいなくなったとしても支柱を失うようなことにはならなかったであろう。

なお、少々話を先取りして言うと、Jkm第24章における、C.S.809年になされた“Mahādhātu-cetiya”(18) の改修・拡張工事の語りの中で、Medhaṅkara師は“Medhaṅkara-mahāsāmi”と呼ばれている［Jkm. p.95；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.134］。それ以前の語りの中では斯様には呼ばれていない。こうした状況から、筆者は、「確立期」のうちC.S.803年からC.S.809年までの間に、Wat Pā Däng派には僧派長を指す“mahāsāmi”の地位が生まれ、Medhaṅkara師は初代の“mahāsāmi”となって、名実ともに同僧派のリーダーになったものと考える。

話を「確立期」の初めに戻すと、Jkm第24章［Jkm. pp.95-96；Cf. Jkm-tr[J/E]. pp.133-136］では、C.S.803年にティローカラート王が即位すると、その5か月後に、同王の支援により、〈…Medhaṅkara・Ñāṇamaṅgala・Sīlavaṃsa大長老を上首とする比丘僧団〉がBiṅga川（ピン川）の“Mahāsṭhāna”という川岸において授具足戒式を執行し、Mahāmaṅgala師、Mahāsuriya師、Mahā-āloka師が授具足を受けた、と語られている。これがチエンマイ国王の支援のもとに最初に彼らが執り行った授具足戒式である。

ここに名が挙げられている比丘のうち、Mahāmaṅgala師は、C.S.805年頃に、三蔵憶持の比丘を率いてJayasena（チエンセーン）都に赴き、その翌年には同地のPallaṅkadīpakaにおいて部分結界を結界したことが述べ添えられている（※この時に結界認定の羯磨文を誦唱したのが上述のDadara-puraのCanda師である）。ここで注目すべきは、このMahāmaṅgala師が、授具足後2～3年程度でありながら、チエンセーンへの伝道を任され、結界羯磨を執行した、という点である。相応の学識を積んでいなければなしえないことであるが、Mahāmaṅgala師は、もとは

Wat Suan Dòk派などの学僧比丘であって、C.S.803年は再授具足であったのかもしれない。また、さらに付言すると、C.S.805年頃にはこの僧派に三蔵憶持の比丘がいたようであるが、この三蔵のテキストがDhammagambhīra師らによってスリランカからもたらされたものであるのか、アユタヤあたりから伝えられたものなのか、それともラーン・ナー地域に既存のものであったのか、判然としない。

次に、同じ第24章によると、C.S.806年には、Nabbisi（チエンマイ）都の“Mahāsṭhāna”で授具足戒式が執行されて、Sūrasīha師がこれを受けた、と言う。執行者の名には言及されていないが、C.S.803年の場合と同様であったのではないかと推察される。

前節で、ヨートチエンラーイ王治世期のC.S.855年にPallaṅkadīpakaの旧部分結界の浄化が行われたということを述べたが、この結界浄化をなした大長老たちの名の中に“Sūrasīha”が挙げられている［Jkm. p.104；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.147］。Tapodārāma碑文の中に“มหาเถรสุรสีห์ มหาโพธิเจ้า”［Tapodharam-Isc. pp.53-54；Cf.古山2016. pp.336-335］とあり、このうちの“สุรสีห์”はパーリ語の“sūrasīha”に対応するので、碑文に現れるこの僧は、Jkmがその名を挙げる結界浄化の大長老と同一人物と考えられる。この大長老は碑文において“มหาโพธิ（Mahābodhi）”の主と記されているが、これはMahābodhāramaすなわちWat Jet Yòtを指しているのではないかと考えられる。C.S.806年に授具足を受けたSūrasīha師というのは、JkmにおいてC.S.855年の語りの中に登場するこのSūrasīha大長老と同一であるかもしれない。

また、同第24章によると、C.S.809年には、“Mahādhātu-cetiy”の大規模な改修・拡張工事がティローカラート王支援のもと行われ、“Medhaṅkara-mahāsāmi”は、その工事に伴ってなされた吉祥バリ儀礼（maṅgala-bali-kamma）の執行者として参加した。そして、塔廟の漆喰工事が完了すると、ティローカラート王は、自分の師（ācariya）であるMedhaṅkara大長老をMahādhātu-cetiya北方に設えた潅頂楼閣に上がらせて潅頂し、“Atulasaktyādhikaraṇa-mahāsāmi”[19]という諡号（nāma-paṇṇati）を授与した、とのことである。

まず、Medhaṅkara師は、C.S.809年までに“mahāsāmi”すなわちWat Pā Däng派僧長の地位にあり、ティローカラート王の王師にもなっていたようである。C.S.807年には父であるTissa（サームファンケーン）王が亡くなり、その遺体はWat Pā Dängにおいて荼毘に付された（※母はC.S.811年に亡くなり同じくWat Pā Däng

で火葬された）［Jkm. p.97；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.137］とのことであるので、この僧派は王室御用僧団の如き様相を呈していたと考えられ、この僧団の“mahāsāmi”であるMedhaṅkara師の威信は相当に高まっていたと想像されるが、諡号の授与によってそれはさらに大きくなったのではなかろうか。

続くJkm第25章“Bilakabaddhasīmā-kathā（ティローカラートの人為結界の話）”［Jkm. pp.96-98；Cf. Jkm-tr[J/E]. pp.136-138］では、その冒頭において、ティローカラート王が、C.S.809年に、父・母への報恩（paṭikaraṇa）として、一時出家を行ったことが語られている。この時、比丘僧団は、“Atulasaktyādhikaraṇa-mahāsāmi”すなわちMedhaṅkara師を阿闍梨（ācariya）とし、Ñāṇamaṅgala師を和尚（upajjhāya）として、王の授具足戒式を執行した、と言う。国王がWat Pā Däng派の流儀による授具足戒式の執行を受けたというのは、同派にとっては大きな自負となり、正統性のアピールには好都合となったであろう（※サームファンケーン王にしてみればWat Pā Dängにおいて死後供養されるというのは思いもかけなかったことであろうが）。

なお、ここで和尚となったÑāṇamaṅgala師というのは、Jkmの文脈から見て、C.S.803年の授具足戒式執行における僧団の上首として、Medhaṅkara師やSīlavaṃsa師とともに、その名が挙げられている長老と見て良かろうと考える。

ところで、Wat Suan Dòk派のMSには、「新しいスリランカ〔派〕の住処（สำนักลังกาใหม่）」において、Medhaṅkara師（เจ้าเมธังกร）を和尚とし、「スリランカの大長老（มหาเถรเจ้าลังกา）」を阿闍梨として、授具足戒式のなされたことが述べられている［MS. p.248］。これはWat Pā Däng派の活動への言及と見ることができる。どこまで事実に沿っているのかは分からないが、授具足戒式のいわゆる「三師」の中に「スリランカの大長老」なる僧を挙げているところは注目できる。

また、第25章によると、ティローカラート王は、C.S.813年には〔亡き〕母・父の不動の福徳（thāvara-puñña）のために、母・父を荼毘に付した場所であるMahārattavanārāmaすなわちWat Pā Dängにおいて、布薩堂を建立した、とのことである。父サームファンケーン王と母后をWat Pā Dängの布薩堂によって永劫に追善供養することにしたのである（※布薩堂が存在し使用される限り寄進者に福徳が生じ続け、追善され続ける）。この翌年には、この布薩堂の結界認定式が行われ、ティローカラート王が自ら“idaṃ visuṃ gāmakkhettaṃ hotu”と唱えて結界処（baddha-sīmā）となる土地を周辺の村落や田畑と分離し、Medhaṅkara師が単独で結界認定の羯磨文を誦唱した、とのことである。そして、この布薩堂の結界は、ティローカラート王の名を冠して“Siridhammacakkavatti-Bilaka-sīmā”と名付け

られた。

Jkmの同章が語るところによると、Wat Pā Dängにこの布薩堂の結界が認定される以前は、〔チエンマイにおいては〕Biṅga川（ピン川）の散水結界（udakukkhepa-sīmā）において授具足戒式を執り行っていたが、この布薩堂の結界が認定された後は、同年の雨安居より、この結界において授具足戒式を執行するようになった、とのことである。母・父の「不動の福徳」のために建立されたものであるから当然ではあるが、それは以後の恒例となり、C.S.814年から「今日」（※Jkmの述作年）に至るまで、Nabbisi（チエンマイ）都の領土においては、すべてのSīhaḷa比丘はあらゆる都市から授具足を希望する人をここに連れて来て、毎年授具足を受けさせた、と言う。

すでにティローカラート王はWat Pā Dänng派の流儀による授具足戒式の執行を受けており、これによって国王から同派の僧団儀式に対する「お墨付き」を得ていたのも同然となっていたであろう。さらにこの前王らの追善供養を目的とした“Siridhammacakkavatti-Bilaka-sīmā”が同寺に設置されたことにより、専有的かつ権威ある僧団儀式の執行場所を確保することができたと言える。このように、その後のWat Pā Dänng派の展開を支える大きな礎がティローカラート王の支援により確立されたわけであるが、Medhaṅkara師への信頼がこの支援を引き出したのに大きく寄与したであろうことは想像に難くない。

なお、この“Siridhammacakkavatti-Bilaka-sīmā”において、C.S.814年に執行された最初の授具足戒式では、比丘僧団は、Medhaṅkara師を和尚とし、Mahāmeghiya師（※不詳）を羯磨文阿闍梨として、Mahānārada師に授具足を受けさせた、とのことである。Mahānārada師のその後についてはよく分からないが、C.S.855年に行われたPallaṅkadīpakaの旧部分結界の浄化をなした大長老たちの中に“Nārada”という名の人が挙げられており［Jkm. p.104；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.147］、もしかするとこの大長老と同一人物であるかもしれない。

翌C.S.815年にWat Pā Dängの布薩堂で行われた授具足戒式では、〔Medhaṅkara師らの〕大長老たちは、“Abhayasārada-mahāsāmi”を上首とする良家の子たちに具足戒を受けさせた、と言う。

この“Abhayasārada-mahāsāmi”は、〔PTS本の〕Jkmにおいては表記の揺れがあり“da”の脱落した“Abhayasāra-mahāsāmi”と表記されている場合もあるのであるが、Bilakapanattādhirāja（ムアンケーオ王）即位以降の語りの中で何度か登場する。

この比丘は、“mahāsāmi”という語が付されていることから知られるように、後にWat Pā Däng派の僧長となる人物である[20]。授具足を受けたばかりのC.S.815年時点の呼称に“mahāsāmi”の語が付けられているのは、Jkmの述作者がWat Pā Dängに住まっていた時期の同寺住持であり同派僧長であったから、特段の敬意を払ってそうしたのであろう。

5. むすび

Jkmが語るところの、筆者（古山）が言うWat Pā Däng派の「最初期」及び「確立期」の動向は、前稿［古山2021.］と本稿に上述したところにより、詳らかになったかと思う。以上により、A.D.15c前半期にラーン・ナー地域でWat Pā Däng派が成立したことに関する同僧派内での語りに対する考察を一応締めくくりたいと思うが、最後にこの僧派のその後の状況について若干ながら述べ添え、本稿の「むすび」としたい。

前節の最後に“Abhayasārada-mahāsāmi”のことに触れたが、この僧長は、ムアンケーオ（Jkm：Bilakapanatta）王治世期の「子年（Mūsika）」すなわちC.S.878年（A.D.1516年、※Jkm-tr[J/E].はC.S.877年としているが）に亡くなっている［Jkm. p.115；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.165］。

ムアンケーオ王は、この事態を受けて、〈今はSīhaḷa-sāsanaにはmahāsāmiがいない。また、Rattavanavihāra（※Wat Pā Däng）はとても朽ちている。RattavanavihāraにおけるSīhaḷa-sāsanaのmahāsāmiの地位にMahābodhārama（※Wat Jet Yòt）の僧院主となっているSaddhammasaṇṭhiraという名の大長老を招請しよう。そのようにすれば、Rattavanavihāraはとても光り輝くであろうし、Sīhaḷa-sāsanaが奨励されるであろう〉［Jkm. p.112；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.160］と考えたという。

ここにはC.S.878年頃におけるWat Pā Däng派の状況に関する情報が示されているが、筆者が特に注目するのは、この僧派の本拠であるWat Pā Dängがひどく老朽化していたという部分である。そして、このことは、当時、同寺の地位が相対的に低くなっていたことを意味するのではないかと思う。

Jkmの語りを見ると、ヨートチエンラーイ王がC.S.849年に即位して、ティローカラート王の火葬がWat Pā DängではなくMahābodhāramaすなわちWat Jet Yòt[21]で執り行われてから［Jkm. p.103；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.147］、この僧派内ではWat Jet

Yòtの寺格が高まり（※こちらが王家の御用寺院となってゆく）、“adhipati”と呼ばれているこの寺の住持の権威が大きくなっていったようである。Wat Jet Yòtの寺誌が語っている同寺での三蔵結集開催ということも、この寺の格を高めたであろう。また、ティローカラート王のみならず、ヨートチエンラーイ王自身も同じくWat Jet Yòtで火葬された。恐らくは斯様な状況においてWat Pā Dängの王家御用寺院としての地位が相対的に低くなり、そこに王家の財政難なども相俟って［Cf. Penth2004. pp.126-127］、いつしか修繕工事の実施などに注意が払われなくなったのではないかと考える。

ヨートチエンラーイ王は臣下のクーデターによって退位させられ、その跡を継いだのがC.S.857年に即位した当時13歳のムアンケーオ王であるが［Cf. 古山2016.］、前王の時代から始まり、そして自らも継承してきたWat Jet Yòt偏重の路線（※即位後しばらくは王本人ではなく母Siriyasavatī王妃など近い周辺者の意向であろう）を、C.S.878年の“Abhayasārada-mahāsāmi”の死を契機に変えようとしたのではなかろうか。つまり、ヨートチエンラーイ王の頃あたりから捻じれてしまったWat Pā DängとWat Jet Yòtの地位の比重を回復し、ティローカラート王時代の状況に戻そうとしたのではなかろうか、ということである。その背景に何があったのかはよく分からないが、ムアンケーオ王において「黄金期」を築いたティローカラート王時代の在り方を継承することに何らかの意味や価値が見出されたのではないかと思う。

ムアンケーオ王は、ティローカラート王が特段の肩入れをしてきたWat Pā Dängの光輝を取り戻し、かつ“Sīhaḷa-sāsana”すなわちWat Pā Däng派の仏教を隆盛せしめるべく、まず、Wat Pā Dängの住持及び同派僧長にWat Jet Yòtの住持であるSaddhammasaṇṭhira師を推挙した。そして、早々にWat Pā Dängの整備事業に着手し、寺内の“maṇḍapa”と“parivena”を再建して、ティローカラート王の住まいを移築して新住持の住居とした［Jkm. pp.112-113；Cf. Jkm-tr[J/E]. pp.160-161］。また、C.S.873年の雨安居からWat Jet Yòtにおいて恒常的になされてきた〔ティローカラートおよびヨートチエンラーイ両王への追福のための〕授具足戒式の執行を、Wat Pā Dängに移行し、かつてティローカラート王が同寺に寄進した布薩堂すなわち“Siridhammacakkavatti-Bilaka-sīmā”で行わせることにした［Jkm. pp.113-114；Cf. Jkm-tr[J/E]. pp.162-163］。

ちなみに、この整備事業には2年ほどかかり、Saddhammasaṇṭhira師の入寺は完了後となったので、工事期間中は“mahāsāmi”の空位期間となるのであるが、

Jkmの当初の撰述部分はこの期間に著された［Cf. 古山2017.］。

なお、ヨートチエンラーイ王治世期のC.S.855年にPallaṅkadīpakaの旧部分結界の浄化をなした大長老の中に“Dhammasaṇṭhira”の名があり［Jkm. p.104；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.147］、またTapodārāma碑文の中に“มหาเถรสัทธรรมฐิระ ปราสาทเจ้า”［Tapodharam-Isc. pp.53-54；Cf.古山2016. pp.336-335］とあるが、これらはSaddhammasaṇṭhira師と同一人物であろうかと思われる。そうであれば、C.S.854年の頃は、まだWat Jet Yòtの住持ではなかったということになる（※多分上述のSūrasīha師が住持であった）。また、Saddhammasaṇṭhira師は、C.S.873年に行われたWat Jet Yòtの結界認定式において、“Abhayasārada-mahāsāmi”とともに羯磨文の誦唱をなしているのであるが、この時に、“Abhayasārada-mahāsāmi”は雨安居歴57年で、Saddhammasaṇṭhira師は雨安居歴47年であった、と言う［Jkm. p.106；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.151］。このことから、Saddhammasaṇṭhira師は、筆者の言う「確立期」の後の時期に授具足を受けたWat Pā Däng派の僧ということになるであろう。C.S.880年には“mahāsāmi”となり、同時に“rāja-guru（王の師）”となり、“mahāsāmi-rājaguru”と呼ばれるようになった［Jkm. pp.115-116／pp.118-119；Cf. Jkm-tr[J/E]. pp.165-166／p.171］。

なお、Wat Pā Däng派の仏教の隆盛ということについて付言すると、C.S.876年に、ムアンケーオ王は、Jayasena（チエンセーン）都に赴いた際に、Nabbisi（チエンマイ）都における3つの沙門の僧衆 ― 都市住派（Nagaravāsigaṇa）、Wat Suan Dòk派（Pupphāvāsigaṇa）、Wat Pā Däng派（Sīhaḷasaṅgha） ― を同行させ、翌C.S.877年には同地で各派ごとに授具足戒式を執行させているのであるが、授具足を受けた人数は、都市住派では370名、Wat Suan Dòk派では1011名、Saddhammasaṇṭhira師を上首とする20名の“Sīhaḷavaṃsika”が執り行ったWat Pā Däng派では235名であった［Jkm. p.108；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.154］。このことは以前の拙稿［古山2019.］でも触れているが、Wat Pā Däng派の人数は最低であり、Wat Suan Dòk派の人気のほうが高かった。Wat Pā Däng派は、「確立期」を経てチエンマイにおける王室御用僧団としての権勢と栄光は手にしたかもしれないが、チエントゥンなどへの伝播はさておき、ラーン・ナー王国版図内の他のムアンでは、たいした教勢を有していなかったのかもしれない。この僧派は、「王国の仏教」というよりは「国王の仏教」であったのであろう。ムアンケーオ王がC.S.878年にこの僧派の隆盛を期してテコ入れを思い立った際には、斯様な「現実」も脳裏にあったのではなかろうか。ティローカラート王が熱心に支援して王家肝煎りの御用僧団となりはしたものの、それから70年以上が過ぎても国内ではあまり振るわない、

という「現実」である。これではティローカラート王を模範とすることの意味が薄れてしまいかねない。

蛇足ながら付言すると、現在チエンセーン国立博物館に保存されている、A.D.1976年にパヤオの廃寺（※現在はWat Ratana Vana Ārāmに属す）で発見された碑文［NThSI-C. p.81］には、〈釈迦牟尼瞿曇様が涅槃に入ってから2041年に、大長老様が全部で25僧おられ、Mahāsāra、Maṅgala、Mahāsaddham[m]a、Gunavanna、Ratanalaṅkāraという僧がおられて、出掛けてランカー島の仏様の教えを伝えもたらし、ムアン・ハリプンチャイ（※ラムプーン）に来た。…〉［IHPh. p.224-227；Cf.p.10／Cf. Skilling2009. p.77］とある。これは、ムアンケーオ王治世期に当たるC.S.860年（B.E.2041年）頃のことを伝える内容であるが、この時期にも、かつてのDhammagambhīra師たちのような大人数でスリランカへ修学に行くラーン・ナー僧たちがいた。チエンマイでスリランカ直伝の“Sīhaḷa-sāsana”であることを標榜するWat Pā Däng派が王家の外護のもと発展していても、“Sīhaḷa-sāsana”はこの僧派に入って学べば事足りるということではなかったようで、直接スリランカで仏教を学んでラーン・ナー地域にもたらそうとする長老比丘たちがいたのである。Wat Pā Däng派のいわば「ブランド力」というのは、C.S.860年になっても然程絶大ではなかったのだろう。先述のC.S.877年になされたチエンセーンでの授具足戒式執行における各僧派の結果（人数）にも、斯様な状況が投影されているのではなかろうかと思う。

Saddhammasaṇṭhira師は、ムアンケーオ王が世を去った翌年のC.S.888年に亡くなっている［Jkm. p.127；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.184］。僧長として在位した期間は、わずか10年程であった。この間にWat Pā Dängに来客堂や住持用僧房、池などの設置が進められ、同師も“rāja-guru”として種々の場で活躍したようであるが、この僧派を王国内でどれだけ隆盛させることに成功したのかはよく分からない。

ちなみに、Jkmには、Saddhammasaṇṭhira師に“rāja-guru”の称号を与えた直後の出来事として、ムアンケーオ王が、“Saṅgha-rāja（僧団王）”の住居としてSiribhūmi村を、“Mahāsāmi”にはPubbārāma（Wat Bupphārāma、Cf. 古山2016. p.324註(39)）を、Ñāṇabodhi長老（※上述した“mahāsāmi”の同名長老とは異なる僧であろう）にはMahācetiyārāma（Wat Jedī Luang）を施捨した、という語りがある［Jkm. p.119；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.172］。Hans Penthは、雨安居の開始にあたりこれら3ケ所には住職がいなかったので、王はその空席を満たすべく「与えた」のである、と解釈している［Jkm-Ind. pp.177-178］。筆者も同様に解釈する。Siribhūmi村について検討の余地が残されているが[22]、Hans Penthの述べるとおりであれば、この時期、

チエンマイ都における国王建立の名刹であるPubbārāmaやMahācetiyārāmaに後継住持がいなかったということになり、この時期の同都における僧界の状況（人材不足）を垣間見ることができるかと思う。Wat Pā Dängの整備が進む一方で、他の王家ゆかりの寺院では住持不足の問題が起きていたのかもしれない。

なお、この語りに登場する“Saṅgha-rāja”が誰であるのかは、Jkmの語りからは分からない。Jkmには、C.S.858年にムアンケーオ王がNabbisi（チエンマイ）都の東にPubbārāmaという寺院を建立したことが語られている［Jkm. p.104；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.148／Cf. 古山2016. p.324註（39）］。*Chiang Mai Chronicle*では、ムアンケーオ王がPubbārāma（บุพพาราม = Wat Bupphārāma）を建立した際に、MahāsaṅgharājaのPussadeva師が来てMahāsaṅghanāyakaとなった云々［C-Chronicle. pp.106-107；C-Chronicle-tr. p.160］と述べられている。Pussadeva師というのはJkmには登場しない長老である。Wat Pā Däng派の長老なのであれば、Jkmはそれと分かるような語りをどこかですると思われるが、現存テキストにおいてそのような語りを筆者は見出すことができない。検討の余地は残るが、Pussadeva師は都市住派かWat Suan Dòk派の長老ではなかったかと思われる。C.S.880年における“Saṅgha-rāja”も同様ではなかったのではなかろうか。少なくともSaddhammasaṇṭhira師は当時“Saṅgha-rāja”ではなく、その地位はあくまでも“Mahāsāmi”であったかと思う。

なお、ムアンケーオ王の玉座を継いだケート王（Jkm：Yuvarāja）は、「如法の王（dhammika-rāja）」であったそうであるが、Saddhammasaṇṭhira師が亡くなると、「自分の師」を連れて来てその出家地であるWat Jet Yòtの住持とし、同寺の住持であったMahāsarabhaṅga師をWat Pā Dängに転住させて“Saṅgha-rāja”としたが、“mahāsāmi”すなわち同派僧長には“Mahādeviyārāma（大王妃の僧院）”であるUttaravihāra（※不詳）のMahāsuriya長老を就けた、とのことである［Jkm. pp.127-128；Cf. Jkm-tr[J/E]. pp.184-185］。Wat Pā Dänng住持を僧界全体の長である“Saṅgha-rāja”に任命したというのは、王家御用僧団たる同僧派の権威を高めるための策かと考えるが、そうしなければならないような、ムアンケーオ王時代と同様の「現実」があったのであろうか。それはさておき、Wat Pā Dänng住持を“Saṅgha-rāja”としたことで、同派の“mahāsāmi”は同寺住持以外の長老が就くことになった。１つの僧派内に権威を及ぼしうる高僧が２名いる、という「二重構造」の如き状況となったわけである（※Wat Suan Dòk派がそうであった。Cf. 古山2020. p.246）。この２僧とは別にケート王が師と仰ぐ長老がWat Jet Yòtにいたわけであるから、「三重構造」と評したほうが良いのかもしれない。このような僧派の複雑な指

導系統のもとでWat Pā Däng派がその後さらなる発展を遂げたのどうかは、Jkmの語りがC.S.889年のことまでしかないので分からない。

本稿に使用した略記

C.S.：Cūla-sakkarāja（จุลศักราช：タイ小暦）　B.E.：*Buddhist Era*（พุทธศักราช：タイ仏暦）

BEFEO：*Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*　JPTS：*Journal of the Pali Text Society*

JSS：*The Journal of the Siam Society*

参考・参照文献と略号

C-Chronicle.: อรุณรัตน์ วิเชียรเขียว, เดวิด เค. วัยอาจ, ed. *ตำนานพื้นเมืองเชียงใหม่*. B.E.2543. Chiang Mai: Silkworm Books, B.E.2547（Rep.）.

C-Chronicle-tr.: *The Chiang Mai Chronicle, Second Edition*. Trans. David Wyatt & Aroonrut Wichienkeeo. Chiang Mai: Silkworm Books, 1998.

Daniel2006.: Daniel M. Veidlinger. *Spreading the Dhamma , Writing , Orality , and Textual Transmission in Buddhist Northern Thailand* . Chiang Mai: Silkworm Books, 2006.

Hinüber2000.: Oskar von Hinüber. *'Lān Nā as a Centre of Pāli Literature During the Late 15th Century.'* JPTS xxvi（2000）: pp.119-137

Hutchinson1951.: E.W.Hutchinson. *'The Seven Spires, a Sanctuary of the Sacred Fig Tree at Chiengmai.'* JSS 39.1（1951）: pp.1-68

IHPh.: สุจิตต์ วงษ์เทศ. *ประชุมจารึกเมืองพะเยา: Inscriptional History of Phayao*. Bangkok: มติชน, B.E.2538

Jkm.: A.P.Buddhadatta, ed. *Jinakālamālī*. London: PTS, 1962.

Jkm-Ind.: Hans Penth. *Jinakālamālī Index, An Annotated Index to The Thailand Part of Ratanapañña's Chronicle Jinakālamālī*. Chiang Mai: PTS &Silkworm Books,1994.

Jkm-tr[C/P].: George Cœdès. *'Jinakālamālinī (Texte)* .' BEFEO 25（1925）: pp.36-72

Jkm-tr[C/F].: George Cœdès. *'Jinakālamālinī (Traduction)* .' BEFEO 25（1925）: pp.73-149

Jkm-tr[J/E].: Ratanapañña Thera. *The Sheaf of Garlands of the Epochs of the Conqueror, Being a Translation of Jinakālamālīpakaraṇaṃ*. 1968. Trans. N. A. Jayawickrama. London: PTS, 1978（Rep.）.

MFB.: 'Chronique du Mahāthera Fạ Bŏt.' *Annales du Siam, Première Partie, Chroniques de: Suvaṇṇa Kamdëng. Suvaṇṇa K'ôm Khăm. Siṅhanavati*. Trans. M. Camille Notton. Paris: Charles Lavauzelle, 1926. pp.35-80

MS.: *ตำนานมูลศาสนา*. Nonthaburi: สำนักพิมพ์ศรีปัญญา, B.E.2557.

MS[CP/E].:Sommai Premchit & Donald K. Swearer. '*A Translation of Tamnān Mūlasāsanā Wat Pā Daeng: The Chronicle of the Founding of Buddhism of the Wat Pā Daeng Tradition.*' JSS 65.2（1977）: pp.73-110

MS[CP/T].:*Tamnan-Mulasasana, Ttransliteration Series IX*. Trans. Sommai Premchit & Puangkam Tuikheo. Chiang Mai: Chiangmai University, 1976.

NThSI-C.: Marek Buchmann. *Northern Thai Stone Inscriptions（14th-17th Centuries）: Catalogue, Abhandlungen Für Die Kunde Des Morgenlandes Band73,2*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 2012.

Ongsakul 2005.: Sarassawadee Ongsakul. *History of Lan Na*. Ed. Dolina W. Millar & Sandy Barron. Trans. Chitraporn Tanratanakul. Chiang Mai: Silkworm Books, 2005.

Penth1994.: Hans Penth. *A Brief History of Lan Na, Civilizations of Nothern Thailand*. Chiang Mai: Silkworm Books, 1994.

Penth2004.: Hans Penth. *A Brief History of Lan Na, Nothern Thailand from Past to Present*. Chiang Mai: Silkworm Books, 2004.

Skilling2009.: Peter Skilling. '*Theravāda in History*.' Pacific World, Journal of the Institute of Buddhist Studies Third Series 11（2009）: pp.61-93

Sooksawasdi2013.: Surasawasdi Sooksawasdi. '*Buddhist Sects in Lān Nā from the Reign of King Tilōk to that of Phayā Käo（1441-1525）: Studies of Dated Bronz Buddha Images in Chiang Mai.*' Silapakorn University Journal of Social Science, Humanities, and Arts 13.2（2013）: pp.149-178

Tapodharam-Isc.: *Curpus of Lān Nā Inscriptions vol.10 Inscription in the Chiang Mai Province , Part 2, ประชุมจารึกล้านนา เล่ม ๑๐ จารึกในจังหวัดเชียงใหม่ ภาค ๒* . Chiang Mai: Archive of Lan Na Inscriptions, Social Research Institute Chiang University, 2005 . pp.38-55

Wichienkeeo1996.:อรุณรัตน์ วิเชียรเขียว. *วัดร้างในเวียงเชียงใหม่*. B.E.2529. Chiang Mai: สุริวงศ์บุ๊คเซน เตอร์（Suriwong Book Centre）, B.E.2539（A.D.1996）（Rep.）

Y-Chronicle.: พระยาประชากิจกร. *พงศาวดารโยนก*. Nonthaburi : สำนักพิมพ์ศรีปัญญา, B.E.2557.

Zinme.: Sithu Gamani Thingyan. *Zinme Yazawin, Chronicle of Chiang Mai*. Ed. Tun Aung Chain. Trans. Thaw Kaung & Ni Ni Myint.Yangon: Universities Historical Research Centre, 2003 .

飯島2020.: 飯島明子「第二章　北方「タイ人」諸国家」飯島明子・小泉順子編『世界歴史大系タイ史』、山川出版社、2020年

中村2015.: 中村哲夫『タイ北部歴史伝説探訪 改訂版』、（私家版）、2015年

古山2016.: 古山健一「Yod Chiangrai王とTapodārāmaの建立」『駒澤大学仏教学部論集』第47号（2016年10月）

古山2017.: 古山健一「*Jinakālamālī* について ―特に1つの難句をめぐって―」『駒澤大学仏教学部論集』第48号（2017年10月）

古山2019.: 古山健一「Wat Pā Däng派の成立に関する小考」『駒澤大学仏教学部論集』第50号（2019年10月）

古山2020.: 古山健一「Wat Pā Däng派の成立に関する小考（2）」『駒澤大学仏教学部論集』第51号（2020年12月）

古山2021.: 古山健一「Wat Pā Däng派の成立に関する小考（3）」『駒澤大学仏教学部論集』第52号（2021年10月）

L-Dict.: *พจนานุกรมภาษาล้านนา, The Lanna Dictionary*. Chiang Mai : สถาบันภาษา ศิลปะและวฒนธรรม มหาวิทยาลัยชภัฏเชียงใหม่, B.E. 2550.

NTh-Dict.: อรุณรัตม์ วิเชียรเขียว และคณะ. *พจนานุกรมศัพท์ล้านนา เฉพาะคำที่ปรากฏในใบลาน, The Northern Thai Dictionary of Palm-leaf Manuscripts*. Chiang Mai : Sikworm Books, B.E.2539.

タ日.: 冨田竹二郎編『タイ日大辞典』、日本タイクラブ・めこん、1997年

タ辞.: 松山納『タイ語辞典』、大学書林、1994年

註

（1）Wat Pā Däng（ワット・パーデーン）派のあらましについては、古山2021.の註（1）に述べてあるので、これを参照されたい。

（2）*Jinakālamālī* については古山2017.を、またWat Pā Däng版*Mūlasāsanā* については古山2021.の註（3）を、それぞれ参照されたい。

なお、すでに古山2021.において述べてあるが、これら2つの史書は、Wat Pā Däng派形成の最初期の状況を把握するための貴重な材料ではあるが、いわゆる「一次史料」ではない。JkmはA.D.16cの初頭に撰述されたものであり、MS.CPのほうはA.D.17cの初め頃に編まれたと推定されるものである。Wat Pā Däng派形成の最初期は大雑把にはA.D.15cの前半期と見ることができるが、そうすると、Jkmの述作はその時期から100年程後のことであり、MS.CPの編述に至っては少なく見積もっても約200年も後のことである。これらが編まれた場所は、Jkmのほうはチエンマイと考えて差し支えないが、MS.CPはチエントゥンのようである。言うまでもなく作者は同一ではないし、その作者はWat Pā Däng派形成の最初期に生きていてその時期の諸々の出来事に関与した当事者でもない。その語りは、Jkmであればラーン・ナー地域でこの僧派が一定の地位を得るに至った後の時期（ただしWat Suan Dòk派は健在）における伝聞〔およびその解釈〕や歴史認識、自派に関する主張などを、MS.CPであれば先行のスリランカ系僧派であるWat Suan Dòk派のチエントン枝派との

諍論に「勝利」したことになり、かつこの枝派が既に消滅した後の時期におけるそれらを、それぞれ紡いだものである。換言すれば、JkmであればWat Pā Däng派形成の最初期から100年後に、MS.CPならばその200年後に、それぞれの作者が、それぞれの立場と状況の下で、当該の出来事について受け止めるところを語ったもの、ということである。故に、この両書におけるWat Pā Däng派が形成されようとしていた草創期の出来事についての語りを、何らの検証なくそのまますべてを「史実」と見做すわけにはゆかないだろう。両書とも貴重な史料ではあるが、常に斯様な留意のもとにその語りと向かい合う必要があると思う。

(3) Jkmから読み取れる彼らスリランカ渡航僧たちの主たる修学目的とは、当時のスリランカでおこなわれていたパーリ語の“akkhara-paveṇi”（パーリ語字音体系の慣用）と、これに随ったパーリ語の“pada-bhāṇa”及び“sara-bhaññ a”（併せて、言わば「読誦法」）を学ぶためである。MS.CPからも同様のことを読み取ることができる。詳しくは古山2019.を参照されたい。また、古山2021.の第3節「MS.CPの語りにおけるスリランカを去った後の動き」の中に示した、Ñāṇagambhīra師とソーンクウェーやスコータイの僧らとの問答のテーマからも、そのことを察することができる。スリランカに渡航した修学僧たちは、これによってチエンマイ等の僧団儀式におけるパーリ語読誦の問題点を改めようとしたものと考えられるのであるが、このことを筆者（古山）は「パーリ語改革」と呼ぶ。

(4) *Zinme Yazawin*（※ミャンマー所伝の*Chiang Mai Chronicle*本）における「Wat Pā Däng派史」の中でもJkmと同じようなことが述べられていることを付言しておきたい［Cf. Zinme. pp.45-46］。

(5) Rāja-kūṭaとは、チエンマイ都城内の寺院Wat Jedī Luang（วัดเจดีย์หลวง）の大仏塔を指す。Jkmにおいては、“Mahācetiya”や“Mahāvihāra”、“〔Mahāvihāraの〕mahāthūpa”などとも呼ばれている。Jkmにおける同寺の語り全体を概観するのには、ひとまずJkm-Ind. における“Wat Jedī Luang（Chiang Mai）”の項（pp.210-213）が簡便である。

Jkm第23章“Sīhaḷasāsanāgamana”の語り［Jkm. p.92；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.128］によれば、サームファンケーン（Tissa）王の父であるセーンムアンマー（Lakkhapurāgama）王が、16年の在位期間中にチエンマイ都（Nabbisi-pura）の中央に、このRāja-kūṭaを建設し始めたのであるが、完成しないうちに王は亡くなったため、Rāyā-mahādevī（※“rāyā”の部分は「妻」を意味する“jāyā”であったのかもしれない。Cf. Jkm-tr[J/E]. p.128 *footnote* 3）が完成させた、とのことである。ただし、その少し前の箇所［Jkm. p.91；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.127］と、第22章“Sīhaḷapaṭimā-kathā”の末部の箇所［Jkm. p.90；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.126］には、クーナー（Kilanā）王の時代の話の中に、チエンマイ都城内部にあった“Mahācetiya”と“Mahāvihāra”への言及があり、かつ、クーナー王が“Mahāvihāra”の大塔の西南側の隅に

シヒン仏像（Sīhaḷa-paṭimā）を安置するための龕室（guhā）をつくったことが語られている。この“Mahācetiya”や“Mahāvihāra”がWat Jedī Luangを指しているのであれば、寺院そのものはセーンムアンマー王よりも以前に存在していたということになるだろう。もともとはJotikārāmaという名の古い寺院であったとする伝承もある（Cf.拙稿「タイ・チエンマイWat Chiang MunのSetangamani仏像について」『駒澤大学仏教学部論集』第41号（2010年10月）pp.299-298註（19））。Rāja-kūṭaというのは、この既存寺院の中にあった塔を拡張したものか、あるいはそこに新たに建立された仏塔ということになるであろう。

Chiang Mai Chronicle（*ตำนานพื้นเมืองเชียงใหม่*、※以下同様）にもこの寺院の建立のことが語られている。それによれば、象に関する学問（คชสาสตร์＜Skt. gaja-śāstra）の知識に精通していたクーナー王は、死後にニグローダ樹の精霊（รุกขเทวดา＜P.rukkha-devatā）に生まれかわり安穏が得られず、天界に生まれかわることを願っていた、と言う。そして、ある時、ニグローダ樹の近くを通りかかったチエンマイとバガンを往来する交易商人の前に姿を現し、遠くからでも見えるような巨大な塔廟（เจติยะ＜P. cetiya）を都の中央に建立するよう息子のセーンムアンマー王に言伝を依頼した（※追善の要求）。この言伝が切っ掛けとなって、塔廟が建立されることになった。しかし、セーンムアンマー王の在世中には塔廟が完成しなかったため、クーナー王の王妃（妻）がその後を引き受け、完成させた。そして、当初この塔廟は“กู่หลวง”（クー・ルワン）と呼ばれていたと言う。ティローカラート王の時代にこの塔廟が崩れたため、同王はC.S.800年にMün Damphra Khot（หมื่นด้ำพร้าโคต、※次の註を見よ）に再建・拡張工事を命じた。工事には3年の月日を費やし、完成後には“เจติยหลวง”（ヂェディ・ルワン、※เจติย＜P. cetiya）と呼ばれるようになった、とのことである［C-Chronicle. pp.69-71；C-Chronicle-tr. pp.109-112］。なお、建立当初の呼び名が“กู่หลวง”であったのであれば、その塔廟には仏舎利は祀られていなかったと思われ［Cf. C-Chronicle-tr. p.111 *footnote* 85］、仏像安置の龕室を崇拝中枢とする塔廟であったのかもしれない。

(6) “Sīhaḷa-gotta”という名の人物は、Jkmにおいては、ティローカラート王治世期の記事に現れる。その名を“Sīha-gotta”と表記している場合もある。Jkmにおいては、“mahāsenāpati（大将軍）”の地位にあったティローカラート王臣下であるということと、造塔や造像の事業において監督責任者を命じられていることが知られる。

この“Sīhaḷa-gotta”という人は、ラーン・ナー地域撰述のタイ語年代記に登場するMün Damphra Khot(หมื่นด้ำพร้าโคต)という人物に同定されている。Jkm-tr[J/E].の註記（※人名を“Muen Dam Phra Khot”とローマ字に翻字）には、“The Minister of Works”とあり、彼がスリランカの寺院建築の型を知るために同地へ渡ったとする*Yonok Chronicle*（*พงศาวดาร โยนก*、※以下同様）の語りや、インド・ブッダガヤー寺院の図面を入手するために派遣されたとするチエンマ

イの古伝の話（※ Dhanit Yuphoの所論）を紹介している（p.140 *footnote* 3）。*Chiang Mai Chronicle* 英訳の註記には、〈この人の称号は、公共事業（建設）についての専門知識の如き何かを示している〉［C-Chronicle-tr. p.112 *footnote* 86］と述べられている。

Hans Penth は、Jkm-Ind. の中で、*The Chronicle [/Legend] of Mahāthera Fā Bot*（※ 以下 MFB）の語りを紹介している（pp.211-212）。その語りによると、Mün Damphra Khot（※ M.C.Nottonの仏訳本では“Mǔn Dăm Phąkhŏt”とローマ字に翻字）は、ティローカラート王よりも年下で、同王が即位する前の王子時代からの親友であった、と言う。長じて、仲間と共にスリランカとインド・タッカシラーへDhammaを学びにゆき、さらには三ヴェーダにおける呪法の研鑽も積んだ。帰国したのはティローカラートが国王に即位した後で、王は彼を大将軍の位に就けた。その後、ティローカラート王よりMahācetiya Luáng（= Wat Jedī Luang）建設の責任者を命じられ、建設地の選定（※王宮南東にあったJotikārāmaの場所を選ぶ）や建設工事、寄進勧募など事業全体を司った。そして、塔の基壇に8体の象の像を配置し、この象にヴェーダの呪文を唱え、ヴェーダの呪文を記した呪符（P. yanta、Skt. yantra）を入れ、各々に3体の戦士像を設置した、と言う［MFB. pp.47-48］。

Mün Damphra Khotという人は、寺院建立や造塔・造像に関する知識や技術に造詣が深かったのであろう。またJkmやMFBが「大将軍」の地位にあったことを語り、タイ語名に「1万人の長」を意味する“Mün”という高位の叙階称号が付されていることから、建設部隊や建設局のようなものを指麾していたのであろう。スリランカなどへの渡航経験もあったのかもしれない。Jkmの“Sīhaḷa-gotta”という人名表記はそのことに因んでいるのであるとすれば、Dhammagambhīra師がスリランカから持ち帰った“Jinavara-dhātu”がこの人の手に渡った経緯を想像できなくもない。ところで、先ほどのMFBの語りから、筆者（古山）は、この人には、つくり上げた宗教建造物を〔世俗的に〕聖化なり呪的な強化なりをなしうる、ヴェーダ祭官的な側面があったのではなかろうかとも想像する。いずれにせよ、ティローカラート王の仏教事業を支えた重要人物の1人であることは確かである。

Chiang Mai Chronicle によれば、C.S.837年に、ティローカラート王はWat Jedī Luangの仏塔建設工事を命じ、C.S.841年に完了した［C-Chronicle. p.101；C-Chronicle-tr. p.152］。この工事は、Jkmに語られる、Sīhaḷagotta大将軍が行ったC.S.840-843年のRāja-kūṭa改修工事を指しているのかもしれない。C.S.842年には、ティローカラート王の命で、彼はピン川域のムアンや他のムアンの徴税法を金、銀、貝貨幣（เบี้ย）によるものに改め、これによって王庫が潤ったと言う［C-Chronicle. p.104；C-Chronicle-tr. p.156］。この人が何故に徴税法改定の仕事を命じられたのかはよく分からないが、Wat Jedī Luangの仏塔改修工事が実は

C.S.837年からC.S.843年まで続いていて、C.S.841年の「完了」というのは工事中断を意味するのであれば、もしかすると工事が資金難に陥っていたのを解決するためであったのかもしれない。仏塔は、徴税法を改めた翌年のC.S.843年に落成した［C-Chronicle. p.104；C-Chronicle-tr. p.156］。そして、仏塔落成の翌年にMün Damphra Khotは亡くなり、その遺骸はYuam Tai（เมืองยวมใต้、※現メーホンソーン県メーサリアン郡）に埋葬されたとのことである［C-Chronicle. p.104；C-Chronicle-tr. p.156］。ティローカラート王はC.S.849年に亡くなったと述べているので［C-Chronicle. p.106；C-Chronicle-tr. p.158］、彼は国王よりも早く亡くなった。ところで、このYuam Taiというのは、ティローカラートが王子であった時期に統治していたムアンである。父に疎まれ左遷されて辺地であるYuam Taiのムアン主に配置替えさせられた［C-Chronicle. p.77；C-Chronicle-tr. p.121］。これが父サームファンケーン王からの王位簒奪の切っ掛けとなった。もしかすると、このYuam TaiはMün Damphra Khotの故郷であり、彼はこの時期にティローカラート王の知遇を得たのかもしれない。MFBが語るように、ティローカラート王の即位前にスリランカ等へ渡航し、即位後に戻ったのであれば、その時期はDhammagambhīra師らのスリランカ修学の時期と重なるが、実際のところはどうかは分からない。

(7) ここでは〈12歳から王権を行使した〉と述べられているが、その後方では、〈…ところで、年齢57歳のTissa王は、16年のあいだ王子となって、41年のあいだ王権を行使し、自分の息子であるSiridhammacakkavatti-yuva-rāja（※ティローカラート王）に王位を委譲して、4年のあいだ生きて無常性に至った（亡くなった）〉［Jkm. pp.94-95；Cf. Jkm-tr[J/E]. p.133］と述べられており、16歳までは王子（rāja-putta）という地位であったとしている。12歳で前王の跡目を継いだが、即位式は4年程後に執り行われたということなのかもしれない［Cf. Jkm-tr[J/E]. p.128 *footnote* 7；p.133 *footnote* 5］。なお、この王権を行使していたとされる「41年間」には、〔クーデターによる退位で〕王位を委譲したあとの存命期間4年が加えられている可能性が考えられるようである。

(8) 飯島明子は〈クーナー王時代以降、王権が国中で最大最高の仏教擁護者として君臨するようになったのちも、ラーンナーの人びとと国家の宗教生活が仏教のみに依拠したわけではない。…〉［飯島2020. p.120］と述べている。

(9) *Chiang Mai Chronicle*におけるC.S.763年（A.D.1401年）のサームファンケーン王即位のことを述べている箇所には、王子が王になると、〔Wat Chiang Yünの大管主（มหาสวามี）であるBuddhañāṇa師の予言どおり〕母親は「Tilokacuk妃（ติโลกจุกเทวี）」という名の大王后（มหาเทวี：P.Mahādevī）となり、Panna Fang Kæn（พันนาฝังแกน、パンナー・ファンケーン：現チェンマイ県メーテーン郡タンボン・インタキン）にある自身の出生地に、Wat Phœng（วัดเพ็ง）

という名の美しい寺院を建立した、と語られている［C-Chronicle. p.70；C-Chronicle-tr. p.111］。これに付された脚注には、このWat Phœng（วัดเพิง）が、Jkmに現れるPuracchanna大精舎と同一であるとする説明がなされている［C-Chronicle. p.70 *footnote* 77］。パーリ語の“Puracchanna”という複合語のうち、“pura”はタイ語の“เมือง”に、同じく“channa”は“มุง”に、それぞれ意味が相当するとして、Jkmに現れるところの“Puracchanna〔-mahāvihāra〕”に当たるWat Mung Muang（วัดมุงเมือง）がWat Phœngであると述べている。Dhanit Yuphoは、この寺院をファンケーンのWat Mung-Muangである、と述べているとのことである［Jkm-tr[J/E]. p.129 *footnote* 1&2；※C-Chronicle-tr. p.111 *footnote* 83にもその説が紹介されている］。このように“Puracchanna〔-mahāvihāra〕”はファンケーンのWat Mung Muangに比定されるとする説が先学により示されきているのであるが、Hans Penthは、Jkm-Ind. の“Puracchannamahāvihāra”の項の中で、この寺院については“not identified”としている［Jkm-Ind. p.155］。

（10）*Kaccāyana-byākaraṇa*は第1章がSandhi-kappa、第2章がNāma-kappaである。文中の〈連声（sandhi）と名詞（nāma）など〉というのは、この最初の2章を挙げて示したものと解することができよう。なお、この「文法書」の中には、Chapaṭa師（Chappada師）の*Kaccāyanasuttaniddesa*なども含まれている可能性が考えられる。同師のこの書は、akkharaに巧みであることの重要性を釈尊の所説として示している（attho akkharasaññāto に対する註参照）。

（11）E.W.Hutchinsonは、このWat Jet Yòtの寺誌の写本の1つに“ประวัติวัดมหาโพธาราม（วัดเจ็ด ยอด）”との表題を付けて現代タイ字に翻字し、かつ研究と要約的英訳（※Jkmにおける関連記述箇所との対照も示している）を付して、1951年にJSS誌上に掲載した。フランス極東学院（École Française d'Extrême-Orient）のWebサイトにある“Lanna Manuscripts”の“Works and articles: Bibliography（English and French）”には、このE.W.Hutchinsonの論稿に“Contains a translation of Tamnan Wat Chet Yot in modern Thai and in English based on a palm-leaf manuscript apparently lost and without other copies.”とのコメントを与えている（https://lanna-manuscripts.efeo.fr/node/58、閲覧2022-04-06）。同氏が翻字した寺誌は、その原写本は目下散逸してしまい、その写しもないようである。

E.W.Hutchinsonは、このWat Jet Yòtの寺誌をJkmの記述と比較した結論として、〈…Wat Jet Yòtについて言及するところのJkmの1節の、しばしば増広された、気ままな翻訳である〉［Hutchinson1951. p.5］と述べているが、単純にJkmの語りを*primitive*、Wat Jet Yòtの寺誌のそれをそこからの*derivative*と位置付けて、後者における前者との違いを「増広」「気ままな翻訳」と片付けることができるのかどうかは甚だ疑問に思う。2つのテキストを対等

に並べた上で、同一の歴史事象について何故に異なる語りがなされているのかを、もう少し踏み込んで考察すべきではなかろうかと思う。

(12) MS.CPの語りにおいては、他の史書がC.S.800年代に入ってからのことと述べているサームファンケーン王の死亡年をC.S.793年のこととし、スリランカ修学を終えた僧たちがチエンマイに帰着する頃にはティローカラート王に代替わりしていたとしていた。そして、ティローカラート王は、彼ら貴族高官らを遣わして出迎えさせ、しかも、Rājamonthian（ราชมนเทียร）やWat Pā Dängなどの寺院を建立し寄進したとされていた。

(13) E.W.Hutchinsonが翻字したWat Jet Yòtの寺誌においては、スリランカ修学僧らの筆頭の名を“Mahāñāṇagambhīra”としている。この寺誌の述作時期がJkmと然程離れてはいないのであれば、このA.D.16cには、筆頭格の僧の名を、Jkmのように“Dhammagambhīra”とする伝承と、Wat Jet Yòtの寺誌のように“Ñāṇagambhīra”とする伝承が平行していた可能性がある。Wat Suan Dòk派のMSでは“Dhammagambhīra”である。

(14) Medhaṅkara師は、C.S.785年のスリランカ修学を決定する会合に参加している。C.S.785年時点で授具足を終えたばかりの新参比丘であったということは考え難いし（雨安居歴10年は超えていたであろう）、それ以前にスリランカを訪れていたかもしれないので、この会合が開かれた時には、少なくとも30歳ぐらいかそれ以上であったろうと思う。となれば、C.S.815年では60歳を超えていたということなる。

(15) パーリ語の“Tālavana-mahāvihara”という寺名は、タイ語の“Wat Pā Tān Luang（วัดป่าตาลหลวง）”に対応するだろう（※tāla→ตาล、vana→ป่า、mahā→หลวง、vihāra→วัด）。前稿にも述べているが、MS.CPの語りの中に、Dhammakitti師がすべての僧らにÑāṇagambhīra師らのもとで授具足を受けるよう呼びかけたため、毎日多くの出家・在家の者が授具足を受けるためにやって来るようになり、彼らは住まう場所のことで難儀するようになり、王妃はチエンマイの西側にWat Pā Tān Luang(วัดป่าตาลหลวง) を建立した、とあり [MS[CP/T]. p.19; Cf. 古山2021. p.254]、ここに“Tālavana-mahāvihara”に対応するタイ語の寺院名が現れる（後にこの寺院にはMedhaṅkara師が配属されたとも言う）。現在、チエンマイ国際空港の北東側のエリア（※チエンマイ都城から見ると西側）に数ケ寺の廃寺遺構があるが、そのうちの1つにWat Pā Tān（วัดป่าตาล）と呼ばれているものがあり、ティローカラート王治世期の建立とされている。MS.CPの語りに現れるWat Pā Tān Luang（วัดป่าตาลหลวง）は、この寺院のことであるのかもしれない。

JkmにはMS.CPと同じ語りは存在しない。“Tālavana-mahāvihara”という寺への言及は、このJkm第27章“Bilakarājakathā”が最初である。ゆえに、“Tālavana-mahāvihara”がスリランカ修学僧たちがチエンマイに帰着して早々に建立された寺院であるのかは分からな

いが、C.S.845年以前に建立のWat Pā Däng派寺院であることは間違いないであろう。

なお、Wat Jet Yòtの寺誌に登場する“พระธรรมทินมหาเถร”が住職をしていたWat Pā Tān Nòi（วัดป่าตาลน้อย）であるが、“Tālavana-mahāvihara”または“Wat Pā Tān Luang（วัดป่าตาลหลวง）”を指すと言いうるのかについては一考を要するかもしれないが、同一と見做されているようである［Cf. Wichienkeeo1996. pp.66-67］。

(16)「最初期」の活動の支援者には、ティローカラート王の兄Bālisadeva王子や他のムアン主がいた。こうした国王周辺の人びとの関与もあったかもしれない。また、スリランカ修学僧たちは、帰路に3～4年ほどアユタヤに逗留しており、アユタヤの僧団などに縁故がある。斯様なところにも注目したのかもしれない。

(17)「確立期」に当たる時期にWat Suan Dòkの住持に就いていたのは、同派の*Mūlassāsanā*（*ตำนานมูลศาสนา*）によれば、“Buddhagambhīra（พุทธคัมภีร์）”という名の長老である。MS. p.252にあるWat Suan Dòkの歴住リストにおいて第5代住持としてその名が挙げられているのがこの長老であり、p.246においては、Wat Suan Dòkの住持として仏教を15年間護持して、C.S.814年（ただし60年周期暦による年記の“กาไคล้”［ไคล้ = กุน：豚年］とは計算が合わない。“กาไคล้”はC.S.805年である）に寿命が尽きた、と述べられている（※古山2020. p.237註（7）の中でもこの記述に言及しているが、そこでは死没年を「C.S.815年」と書いてしまった。筆者の誤記であり、ここにお詫びして訂正する）。つまり、C.S.799～814年の間にWat Suan Dòkの住持であったということである。筆者（古山）の言うWat Pā Däng派の「最初期」の終盤頃から「確立期」にかけて、Buddhagambhīra師がWat Suan Dòkの住持であった。

MSにおいて第4代住持のBuddhapaññā師の行跡を語っている段（p.244）の末部にも“Buddhagambhīra”の死没年があり、そこではBuddhagambhīraはWat Suan Dòkの仏教を15年間護持して、C.S.785年（ここにも同じ“กาไคล้”との年記があるが、計算が合わない）に寿命が尽きた、と述べられている。このテキストは混乱が多く、しばしば当惑させられるのであるが、C.S.785年に亡くなったのはBuddhagambhīra師ではなく、Buddhapaññā師であろう（第4代住持の名はMS. p.252では“Buddhañāṇa”となっており混乱している）。なお、第4代がC.S.785年に亡くなり、第5代がC.S.799年に住持になったのならば、14年ほどの空白期間があることになってしまうが、これをどのように理解すればよいのかは目下は分からない。

MS.CPのWat Suan Dòk歴住リストでは、C.S.787年に“Buddhamāñāṇa”が同寺住職を継承して19年間住まい、C.S.806年にBuddhagambīra師に代替わりしてC.S.821年（カット・マオ［กัดเหม้า］の年）に亡くなった、と語られている［MS[CP/T]. p.12；MS[CP/E]. p.85］。C.S.806～821年がWat Suan Dòkの住持をしていた期間ということになり、MS.の語りとは大きく

異なるのであるが、Buddhagambīra 師が「確立期」において住持であったというところは重なる。

2020年の拙稿において、C.S.806年に Wat Pā Däng派のSomacitta師がチエントゥンに派遣されたというMS.CPの語りを紹介している［古山2020. pp.253-252］が、同師は、チエントゥンにあったWat Suan Dòk派系のWat Yāng Kuangの僧たちから再授具足を拒絶されたが、その際の僧たちの言い分の中に、自分たちはWat Suan Dòkのbuddhagambhīra長老を頭領としており、これに従う、とあった。C.S.806年当時にWat Suan Dòkの住持はBuddhagambīra師であった、というのがMS.CPの認識である。なお、MS.CPの異本には、Buddhagambīra師のほかにBuddhimā師を加えた2長老の名を挙げているものがあるようである。

前置きが長くなったが、MSにおいてWat Pā Däng派を成立させる僧たちのことに言及する箇所［MS. pp.245-246］には、サームファンケーン王治世期頃のWat Pā Däng派の授具足戒式執行にまつわる話のところに、“ท่านผู้เป็นเจ้าพุทธคัมภีร์อยู่ในวัดสวนดอกไม้บ่อาจห้ามเขาได้สักอัน แล”〈Wat Suan Dòk に住まうBuddhagambīra住持猊下は、彼らを何ひとつ制止することができなかった〉（p.246）という記述がある。Wat Pā Däng派の「最初期」及び「確立期」においてWat Suan Dòkの住持であったBuddhagambīra師は、Wat Pā Däng（※MSは“สำนัก”と呼び寺院と見做していないようであるが）の僧たちの活動に対して強硬的な姿勢は取らなかった、あるいは取れなかったようである。斯様なことから、俗人も巻き込んだであろう僧派間の軋轢というのはあったとしても、Wat Suan Dòk派からの排撃というのは然程熾烈ではなかったのではなかろうかと思う。

(18) この“Mahādhātu-cetiya”については、チエンマイWat Jedī Luangの仏舎利塔を指すとする解釈があるが［Cf. Jkm-tr[J/E]. p.135 *footnote*5］、Hans Penthはラムプーンの Wat Phra Thāt Hariphuncahiのそれと考えている［Jkm-Ind. pp.252-253］。

(19) Jkmの英訳では、この諡号は“the Great Sage of Incomparable Powers of Justice”と訳されている［Jkm-tr[J/E]. p.136］。筆者は、この諡号の中に、僧団の係争（諍論）を意味する“adhikaraṇa”の語があるところに注目する。もしかすると、Medhaṅkara師は、C.S.809年までに、何らかの僧団の係争の解決に関わり手腕を発揮したのかもしれない。

(20) この“Abhayasārada-mahāsāmi”または“Abhayasāra-mahāsāmi”は、“mahāsāmi”という語が付されていることから知られるように、Wat Pā Däng派の僧長となる人物なのであるが、いつ頃この地位に就いたのかはJkmの語りから詳らかではない。Jkmの語りを見ると、恐らく“Ñāṇabodhi-mahāsāmi”の後継僧長がこの人物のように思われるのであるが、第3節で述べたとおりÑāṇabodhi師はC.S.855年までは生きていた可能性がある。このÑāṇabodhi師の後継であるならば、“Abhayasārada-mahāsāmi”が僧長となったのはその

年よりも後のことかと思われる。

(21) Mahābodhāramaすなわち Wat Jet Yòtであるが、Jkm第26章の語り［Jkm. pp.98-99；Cf. Jkm-tr[J/E]. pp.139-140］によれば、ティローカラート王が Wat Pā Dängに布薩堂を寄進して結界処 “Siridhammacakkavatti-Bilaka-sīmā” を設置し、ここで恒常的な授具足戒式の執行がなされるようになった後、同王が、Sīhaḷa比丘の面前で菩提樹植樹の法門を聴いて菩提樹を植樹したくなり、C.S.817年に、Nabbisi（チエンマイ）都の北西にあるRohiṇi川の畔の美しい場所にUttamapañña大長老の住居として1つの僧院（ārāma）を建立したのが、その創建の由来である。かつて比丘たちがスリランカへ行き、そこから菩提樹の右側（南側）の枝の種をとって来て、Deva山（ドーイ・ステープ、Cf. Jkm-tr[J/E]. p.139 *footnote*8）の麓の僧院に植えてあった。C.S.817年の雨安居に、ティローカラート王はその菩提樹を新たに建立した寺院に植えなおし、寺院は “Mahābodhārāma”（Mahā-bodhi-ārāma：菩提樹僧院）と知られるようになった。その後、C.S.838年に、同王は、インド・ブッダガヤーの釈尊成道地を模した七大聖地などやmahāvihāraを建立した、とのことである。

なお、E.W.Hutchinsonが翻字したWat Jet Yòtの寺誌には、上述のような創建由来は語られていない。この寺誌は、菩提樹が植樹されたということには無関心のようであり、それよりもWat Jet Yòtで三蔵結集がなされたということのほうに関心があるようである。

(22) Hans Penthは、この解釈を可能とするためには、チエンマイのSiribhūmi村に当たる地区に良い寺院がなければならないとしているが、これに当たる寺院がSī Phūm地区には現存していないようであることを併せて述べている。

〈キーワード〉Wat Pā Däng 派、*Jinakālamālī*、Dhammagambhīra、Ñāṇagambhīra、Medhaṅkara